「言葉による見方・考え方」を育てるための「注文の多い料理店」（宮沢賢治　東京書籍・学校図書５年）の教材研究

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　京都府　立命館小学校　永橋和行

１　表層のよみ　（表層のよみは他にもある。音読、資料提示…）

・語句指導　二千四百円・十円・玄関の札（英語・西洋料理）等の意味を理解させる。

・中心人物を押さえる　二人のわかいしんしの人物像を読みとる。

２　場面分け

　場面分けは、内容を分かりやすくつかむために行う。時・場・人物の三つの要素によって場面を分けていく。

この作品では、「風がどうとふいて～木はゴトンゴトンと鳴りました。」という前後の二つの文を境に、作品は大きく三つに分かれる。一つ目の「風がどうとふいて ～ 木はゴトンゴトンと鳴りました。」の前までが１場面。二つの「風がどうとふいて ～ 木はゴトンゴトンと鳴りました。」の間が、山猫軒での出来事である。山猫軒での出来事を四つの場面に分ける。２場面は、山猫軒に入るまで、３場面は、紳士が注文の意味に気づかずに、次々に出される注文に従っていくところ、４場面は、紳士が注文の意味に気づくが、逃げることができないところまで、５場面は、犬が出てきて山猫を追い払い、二人の紳士が助かるところまでである。そして二つ目の「風がどうとふいて～木はゴトンゴトンと鳴りました。」の後が６場面である。

５場面が最も大きく変化する場面である。５場面を中心にクライマックスを見つけて、構造よみにつなげていく。

１場面　はじめ　～　見当がつかなくなっていました。

２場面　風がどうとふいてきて　～　何か食べたくてたおれそうなんだ。」

３場面　二人はげんかんに立ちました。～　まちがえて入れたんだ。」

４場面　二人は戸を開けて中に入りました。～　泣いてて泣いて泣いて泣い

て泣きました。

５場面　そのとき、後ろからいきなり　～　木はゴトンゴトンと鳴りました。

６場面　犬がフーとうなってもどってきました。～　終わり。

３　構造よみ

　作品の構造を読み取ることで、三つの力がつく。

①作品全体の流れを俯瞰する。

②作品の大きな仕掛け（変化・繰り返し・対応・伏線・暗示・象徴等）が把握できる。

③読むべき箇所を自分の力で見つけることができる。

この作品の発端は、「風がどうとふいて～木はゴトンゴトンと鳴りました。」である。ここから山猫軒を中心とした話になる。異世界への入り口である。

クライマックスは、次の二案が考えられる。

Ａ　二人は、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

Ｂ　そのとき、後ろからいきなり、「ワン、ワン、グヮア。」という声がして、～　飛びこんできました。

Ａは、量的にも時間的にも長く泣き続け、緊張感が一気に高まるところである。しかし二人の紳士が、ここで山猫に食べられてしまったのか、それとも助かったのかどうかはわからない。泣くという変化はあるが、その他には何も状況は変わっていない。

　Ｂは、犬の登場によって、食べられそうになった二人が無事助かる。危機的な状況から脱する大きな変化である。しかし単純に二人が助かって終わっているわけではない。この作品は、終結部の読みが重要となる。

４　形象よみ

○　冒頭　　二人のわかいしんしが、……

　　│

　　○　発端　　風がどうとふいてきて、……

　　│

　○　山場のはじまり　　二人は戸を開けて中に入りました。……

　　│

◎─┼─クライマックス　　そのとき、後ろからいきなり、～　部屋の中に飛びこんできました。

│

　　○　結末　　……木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。

　　│

○　終わり　……もう元のとおりになおりませんでした。

〈形象を読む二つの段階〉

1. 読むべき言葉や文を抜き出す。
2. 抜き出した言葉や文を、文脈と関わらせて読み深める。

〈形象を読む指標〉

1. 導入部では、**人物**、場、時、事件設定を読む。

この作品は、二人の紳士の言動の意味を読み取ることが重要になるが、二人の紳士に寄り添わない読みが中心になる。

1. 展開部以降は、**事件の変化**を中心に読み取る。

事件とは、物語の主要な一連の出来事のこと。しかし出来事だけではなく、人物の見方の変化や人物相互の関係性の変化等も事件ととらえる。

この作品の「事件（プロット）」は、戸に書かれた内容の二重（二人の紳士と山猫）の意味を読みとることである。立場の違いで意味が違ってくるところがこの作品の面白さであり、主題にもつながっている。

〈読むべき箇所と教材研究〉

**〇 初読と再読で違う読みとなることに注意する**

　この作品を初めて読むときは、たくさん注文があって、山猫軒はとても流行っているレストランだと思う。しかし再読してみると、客が注文するのではなく、山猫が客に注文して、人間を食べてしまうレストランという読みに変わる。初読では、紳士の解釈を中心に読みすすめるが、再読では、山猫のねらいを意識して読むことが大切である。

**１ 二人のわかいしんしが、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする ～ 歩いておりました。**

「すっかりイギリスの兵隊の形をして」から、一分のすきもなく兵隊の服装に身を固めた紳士の様子が読みとれる。当時は、兵隊の服装と狩猟用のハンティングドレスと形が似ていた。「ぴかぴかする鉄砲」とは、新品の鉄砲なのか、よく手入れをしている鉄砲なのか、どちらかである。新品の鉄砲ならば、狩りをした経験があまりないのかもしれない。

**２ 「ぜんたい、ここらの山はけしからんね。鳥もけものも一ぴきもいやがらん。～。」**

　鳥やけものが元々いないのか、狩りが下手で見つからないのか二つの可能性が読める。乱暴な口調であり、内容も自分勝手な言い分である。読者は二人に共感するよりも、少し引いて読むことになる。

**３ 「しかの黄色な横っぱらなんぞに、二、三発お見まい申したら、～　たおれるだろうね。」**

　鹿を殺すことを楽しんでいる。狩猟は紳士のスポーツというが、紳士とは思えない残酷な性格である。紳士は、ふつう礼儀やマナーをわきまえている立派な人である。読者は、二人は本当の紳士ではないかと疑って読むことになる。

**４ 「実にぼくは二千四百円の損害だ。」「ぼくは二千八百円の損害だ。」**

二千四百円や二千八百円は、現在でいうと二百万円から三百万円くらいといわれる。二人は、犬の命もお金に換算して考えてしまう。ここも紳士らしくない姿である。

**５ 風がどうとふいてきて、～　木はゴトンゴトンと鳴りました。（発端・結末）**

　全く同じ文が前後二回出てくる。異世界への入り口と出口になる。

**６ ＲＥＳＴＡＵＲＡＮＴ　西洋料理店　ＷＩＬＤＣＡＴ ＨＯＵＳＥ　山猫軒**

英語が二か所使われており、二人の心をくすぐる。イギリスの兵隊の格好をして、西洋にあこがれている二人が、このレストランに入るのは至極当然である。山猫は紳士たちの姿を見て、このようなレストランを作り出したのかもしれない。レストランに山猫軒という名前は普通つけないが、二人は違和感を持っていない。山猫は正直なのか、それともあまり深く考えていないのかもしれない。

**７ 【どなたもどうかお入りください。決してごえんりょはありません。】**

「いりません」ではなく、「ありません」と書かれている。日本語の使い方としておかしいが、二人は遠慮はいらないと解釈をして、おかしさに気づかない。山猫にとっては、遠慮しないという意味である。「どうか」という言葉は、この後四回出てくる。これも山猫のお願いだから聞いてほしいという本音が示されている。

**８ 【ことに太ったおかたやわかいおかたは、大かんげいいたします。】**

二人は、自分たちが大歓迎されていると解釈する。山猫からすると、若くて太っている方が美味しいのである。山猫は素直に自分たちの希望を述べている。

**９ 【当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知 ください。】**

本来、注文は客からするものである。二人は、客からの注文が多くてよく流行っている店だから、時間がかかると解釈する。しかし山猫から客に対する注文が多いということである。だから「どうか」になっており、山猫の本音が示されている。

**１０ 【注文はずいぶん多いでしょうが、どうかいちいちこらえてください。】**

二人は、ここで初めて戸惑いを見せる。しかし結局、注文が多いから時間がかかるんだと自分たちに都合のいい解釈をしてしまう。戸の言葉を自分たちに都合のいいように解釈する二人である。

**１１ 【鉄砲とたまをここへ置いてください。】**

ここから具体的な注文が始まっている。山猫は、危険なものは早く取り除きたいのである。しかし二人は、理由を勝手に考えて納得し、素直に注文に従っている。

**１２ 【どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。】**

ぼうしと外とうとくつは、普通「おとりください」ではなく、「おぬぎください」である。人間は「ぬぐ」であるが、山猫からすると「とる」になる。しかし二人は、疑うこともなく注文に従っている。

**１３ 【ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、さいふ、～みんなここにおいてください。】**

二人は、金気のものやとがったものは危ないと、ここでも自分たちに都合のいい解釈をする。

**１４ 【つぼの中のクリームを顔や手足にすっかりぬってください。】**

この注文も、ひび割れの予防だと解釈してしまう。しかもクリームをぬるふりをして食べるという意地汚さも出てしまう。山猫としては、味つけまでして美味しく食べるための注文である。

**１５ 【クリームをよくぬりましたか、耳にもよくぬりましたか。】**

細かいとこまでよく気がつくと感心してしまう二人。山猫としては耳まで美味しく食べたいのである。山猫が、注意深く紳士の様子を観察して、注文していることがわかる。

**１６ 【料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐ食べられます。】**

山猫の注文には主語と目的語がなく、「食べられます」は、可能と受身の二通りに解釈できる。二人からの注文が一度もないまま、料理はもうすぐできるという。二人からすると、もうすぐ料理を自分たちが食べることができるという解釈となる。しかし山猫からすると、自分たちが二人を食べるのである。

**１７ 【いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。～　もみこんでください。】**

今度という今度は、二人ともぎょっとする。注文は、山猫から二人に注文されていたことが分かるのである。「お気の毒でした」は、山猫の本音がユーモラスに語られている。

**１８ 【いや、わざわざご苦労です。たいへんけっこうにできました。～　おなかにお入りください。】**

「けっこうにできました」は、二人が山猫の注文通りにできたという意味であるが、客を軽視した言葉である。「おなかにお入りください」は、部屋の中に入ってほしいという意味であるが、「お」をつけて丁寧な言葉にしたためにおかしな表現になっている。しかしそのことで、山猫のお腹の中に入ってほしいという本当のねらいも表現されることになる。

**１９ 二人はあんまり心をいためたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙くずのように、～　泣きました。（比喩）**

くしゃくしゃの紙くずのような顔とは、しわだらけの顔のことである。若い二人がしわだらけの顔になり、若さを失い醜い顔になってしまったのである。紙くずは、価値のないもの、捨てられるものである。顔を紙くずに喩えることで、二人の紳士が、価値の無いものであることを象徴的に表現している。

**２０ 二人は、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。（繰り返し）**

二人は、山猫に食べられてしまうという恐怖から泣いてしまう。逃げるわけでも抵抗するわけでもなく、自分たちは何もしないのである。あるいは、できないといってもよい。紳士たちが主体的に行動することは何もないのである。

**２１ そのとき、後ろからいきなり、「ワン、ワン、グヮア。」～　中に飛びこんできました。（クライマックス）**

　死んだはずの犬の登場によって、山猫に食べられそうになった二人の紳士が無事助かる。二人が、危機的な状況から脱する大きな変化である。しかし自分たちの力で脱したわけではない。犬という第三者の力で助かったのである。二人は何もしていないのである。異世界での出来事なので、死んだ犬も生き返るのであろうか。

**２２ しかし、さっきいっぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、～　なおりませんでした。**

犬の命をお金に換算する、自分たちに都合のいいように状況を解釈する身勝手さ、自ら何もしない主体性のなさなど、二人のあり方に対する強烈な批判が「元のとおりになおりませんでした。」に込められている。

５　あらすじと主題

**〇あらすじ**

　二人の紳士が、山猫に食べられそうになり、犬に助けられるが、紙くずのような顔は元に戻らなかった

**〇主題**

言葉の二重性によるユーモア性と風刺

＊参考　読み研関西サークル編 「小学校国語科『言葉による見方・考え方』

を鍛える物語の『読み』の授業と教材研究」二〇一九 明治図書